

創立30th
砥礪
SHIREI



2019.May

15号

愛媛の自然と共鳴する 夢の舞台、砥部キャンパス

医技大の歴史はここから始まった。
若い陶芸作家による砥部焼の進化、
とべ動物園の絶滅危惧種復活への挑戦は
この地で進められている。





Contents

学長挨拶	04
学部長挨拶	05
特集 開学30周年を迎えて	06
大学の四季	07
GLOBAL VIEW	07
MY MEMORIES	
野村 美千江・野本 百合子	08
徳永 なみじ・相原 ひろみ	09
西森 旬恵・高橋 博子	10
宮内 清子	11
岡村 法宜・門屋 孝志	12
野島 一雄・西原 由記	13
今村 朋子	14
研究室紹介	15
客員教授紹介	16
西日本豪雨災害ボランティア	17
地域交流センター事業	18
ご案内	19



活気あふれる 大学を目指して 様々な改革を

橋本 公二

Koji hashimoto

愛媛県立医療技術大学は、医療の分野で社会に役立つことを目指す学生を教育し、地域における医療のリーダーとなる人材を社会に送り出すことを目的とする大学です。本学は、昭和 63 年に開学した愛媛県立医療技術短期大学を前身とし、平成 16 年から 4 年制大学、平成 22 年 4 月から公立大学法人愛媛県立医療技術大学となり、現在 10 年目を迎えます。法人化によって、大学の自己責任に基づいた裁量権が大きくなった結果、大学らしい自由度を発揮した展開が期待でき、活気あふれる大学を目指して様々な改革を進めています。

大学の第一使命である学生教育には既に定評があり、社会で活躍している卒業生は 3,700 名を超えております。保健科学部および助産学専攻科の卒業生は、例年高い国家試験合格率を達成し、就職率 100 %で巣立って行っております。平成 24 年 4 月からは、学部の上に 1 年制の助産学専攻科を 10 名の定員で発足させ、平成 26 年度からは定員を 15 名に増員し、県内唯一の助産師養成課程をさらに充実させています。さらに平成 25 年 4 月からは学生定員を 20 名(看護学科 15 名、臨床検査学科 5 名)増やして、地域や国内の医療職不足に応えようとしています。また、平成 26 年 4 月からは待望の大学院(看護学専攻科 5 名、医療技術科学専攻 3 名)を開設し、平成 28 年 3 月には第 1 期修了生 4 名(看護学専攻科 1 名、医療技術科学専攻 3 名)を送り出しております。

大学のもう一つの使命である研究に関しては、法人化によって大学の自由裁量権が大きくなったことを受けて、学内研究基盤の整備に力を注いで参りました。平成 24 年度からの 3 年計画で、約 7,000 万円をかけて教育・研究機器や設備の更新・充実をはかり、同時に、教員個々への基盤研究費や重点研究費の増額を行っております。こうした努力により、研究は徐々に活性化し、法人化前には毎年数件程度であった文部科学省等の科学研究費採択件数は、平成 29 年度は 15 件、30 年度は 15 件、31 年度は 15 件と飛躍的に増加しております。

地域貢献の面では、本学の特色である地域交流センターを中心に、多くの地域交流企画に加えて、専門職や一般人を対象とした教育活動、医療・介護・行政機関との連携・協力に尽力し、地域に貢献する大学としての使命を存分に果たしています。特筆すべき事業として、平成 27 年度より、愛媛県・西予市との協働で、「地域包括ケアシステムの事業充実を志向した在宅ケア人材育成事業」を 3 カ年実施したほか、平成 30 年度より、今治圏域で「地域包括ケアシステム強化のための人材育成等支援事業」を 2 カ年計画で実施しており、国を始め各方面から高い評価を得ております。

大学の将来計画については、平成 31 年度が第 2 期中期計画の 4 年目にあたり、さらなる大きな発展を目指しております。今後とも各方面のご理解とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



地域において 存在感のある 大学となれるよう

中西 純子

Junko nakanishi

本学広報誌「しれい」を手にとってくださった皆様、ありがとうございます。

本学はおかげさまで昭和 63 年（1988 年）4 月に短期大学として開学、平成 16 年の 4 年制大学化を経て 30 周年を迎えるに至りました。思えば、昭和の最後の年に開学し、今年平成 31 年には再び改元が行われることを考えますと、まさに本学は平成の時代とともに歩んできたと言えます。この間に 3,700 名を超える卒業生・修了生を地元愛媛県はもとより全国の保健・医療現場に送り出してきました。卒業生の中にはすでに大学教授や医療現場の管理職になっている者もあり、頼もしく嬉しい限りです。

個人的なことを申しますと、私自身も短期大学の開学と同時に 20 歳代後半で助手として着任して以来、今日まで一貫してここで務めて参りました。重ねる年齢とともに職位も変わり、今では大学の管理運営を担う立場になりました。多くの学生・先生方・事務職員の方々との出会いと別れがあり、数えきれない思い出は私の宝物です。

昭和 63 年当時はまだ看護師養成、臨床検査技師養成は専門学校がほとんどで、大学はもとより短期大学での養成も数少ない時代でした。そのような時代背景のなか、本学は高等教育に位置付けて看護学・臨床検査学を教授し、将来の 4 年制大学化も視野に入れて教員の育成にも取り組んできました。すなわち、当時の助手たちを対象にした国内 1 か月研修やその発展系ともいえる 2 年間の研究休職（大学院進学）制度です。私はありがたいことにそのいずれの制度においても第 1 号の適用を受け今日に至っています。将来への投資ともいべきこのような制度を作り、背中を押してくださった当時の諸先生方・職員の方々に新ためて感謝申し上げます。

まだ、わずか 30 年の歴史ではありますが、これからも地域において存在感のある大学となれるよう努力してまいりたいと思います。



平成5年頃の大学とその周辺



昭和63年開学年の入学式
初代野島元雄学長



平成16年大学開学記念式典

特集

開学30周年を迎えて

—写真でたどる医療技術大学のあゆみ—



愛媛県立医療技術大学の道のり

- 昭和62年12月 愛媛県立医療技術短期大学認可
- 昭和63年 4月 愛媛県立医療技術短期大学開学
(第一看護学科・第二看護学科・臨床検査学科)
- 平成 3年 4月 愛媛県立医療技術短期大学専攻科開設
(地域看護学専攻・助産学専攻)
- 平成15年11月 愛媛県立医療技術大学(4年制)設置認可
- 平成16年 4月 愛媛県立医療技術大学開学
- 平成19年 3月 愛媛県立医療技術短期大学閉学
- 平成22年 4月 公立大学法人化
- 平成24年 4月 愛媛県立医療技術大学助産学専攻科開設
- 平成25年 4月 愛媛県立医療技術大学保健科学部入学定員増
- 平成25年12月 愛媛県立医療技術大学大学院設置認可
- 平成26年 4月 愛媛県立医療技術大学大学院開設



同窓生と教員によって短期大学の校旗は幕をおろし、愛媛県に返還されました。

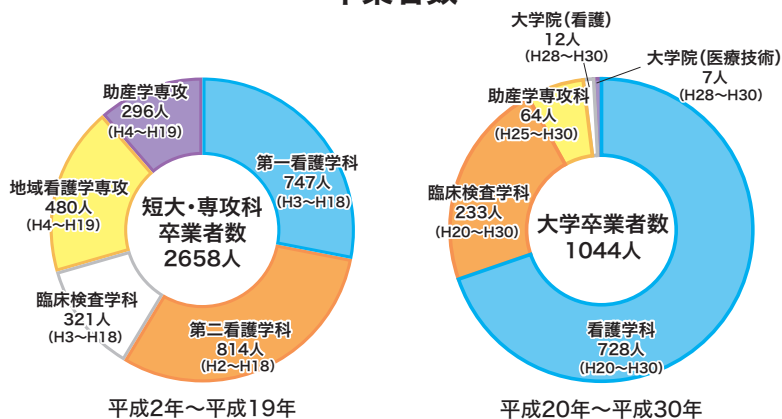


医療技術大学開学除幕式



平成16年度 合同入学式

卒業生数



大学の四季



昭和62年 短期大学



桜の季節



蟬の声響きわたる夏



校庭の秋



雪降る日の中庭

GLOBAL VIEW



高雄医学大学と【学術交流協定】を締結(平成30年6月)



高雄医学大学との交流

高雄医学大学(台湾)と学生交流に関する協定が結ばれました。本学からは、看護学科と臨床検査学科の学生が1～2週間程度、毎年派遣されます。

地域・精神看護学講座 教授

野村 美千江

―地域に開かれた大学を目指して―

私の専門は地域看護学・公衆衛生看護学です。臨地実習は県下 20 市町に及び、現地宿泊を伴う学生の安全確保には実習地の皆さんから多大な支援を得ています。それ故、仕事や恋に悩んだ時、ふと実習地を訪れることがあると卒業生から聞かされました。大切にされた経験と帰りたくなる場所があることは幸いです。遠隔地実習での楽しみは、学生や指導者と食事を共にする機会がもてることです。愛南町でのワイワイ談義からサークルK&K (Kids & Kick-off) が生まれ、初代河本裕佳部長、二代目北川侑佳部長らと一緒に愛媛FCホームゲームで託児を始めました。2007 年シーズン終了後、監督・選手のサイン入り公式ボールが贈られたことは懐かしい思い出です。

本学学生は、遊びたい盛りの年代にもかかわらず、忙しい学業の合間にボランティアな活動に取り組む割合が高いと感じます。特に、県内外から砥部に移り住んだ学生は、日常生活やアルバイトで地域の人々に見守られていることを実感しているからでしょう。近年は、地域の子どもとコラボするフラダンスや避難所ゲームで学ぶ防災教室など、学生たちが地域住民に直接支援する活動が増えました。その背景には、大学と地域をつないでくれる社会福祉協議会やNPOとの交流があるからです。地域の組織団体と同様、地域に開かれた大学として、住民とともに学び育ち合える存在でありたいと願います。



広田村での実習風景



NPO 子育て支援団体ほっかぽっかの皆さん



託児ボランティア:サークルK&Kの学生と保護士さん

基礎看護学講座 教授

野本 百合子

「異動の連絡がありました」という上司の言葉から私の本学との関係が始まりました。公衆衛生専門学校の専任教員をしていた私は、当時、県庁内に設置されていた「短期大学設置準備室」へ異動することになりました。初めての県庁へのバス通勤は、それだけでも疲れました。準備室

の職員数は 11 名だったかと思いますが、女性は看護学科長に就任される予定の原一寿先生、地域看護学を担当される池田澄子先生、そして臨時職員の仲岡理恵さんと私の 4 名でした。

昭和 63 年 4 月の開学を目指してラストスパートとなる最後の 1 年だったため、終業を知らせる 17 時のサイレンが鳴っても帰れない日も多く、緊張続きでした。また、8 月には、当時の伊賀貞雪知事が「定礎式」に来られ、接待役を申しつかるなどの経験もしました。さらには、2 月から 3 月の寒い時期に防寒着を支給され、各研究室や実習室等への納品を確認する仕事もしました。納められた品を収納するために、一日中暖房の効かない部屋で、何百枚ものタオルを折り畳んだことも、今となっては懐かしい思い出です。建物のあちこちには 30 年の歴史が刻まれています。これからも、愛媛県、そしてわが国の医療を支える優秀な人材の育成に貢献できる大学へとさらなる発展をして欲しいと願っています。そして、私自身も、少しでもそれに貢献できればと思います。



MY MEMORIES

基礎看護学講座 准教授

徳永 なみじ

(看護学科卒業生)

平成最後の年に過去を思い起こすと、人生の半分以上をこの砥部の地で過ごしたという事実に驚いています。今回、砥礪の記事を書くにあたり昔の写真を探していると、学生祭の時のものが見つかりました。中庭でたこ焼きを焼いていました。これは確か2年生の時。1年生の時は何をしたらろうかと、さらに記憶をたどってみました。すると微かな記憶が頭の隅に残っていました。企画のタイトルは、たぶん「ピノキオ」。

ピノキオがクジラに飲み込まれるというストーリーにヒントを得て、教室の前方の出入り口を「口」、後方の出入り口を「肛門」に見立てて、入ってから出るまでの通路に人体内部を再現したアトラクションだったと思います。当時の学生祭は、今のように芸人さんを呼ぶこともなく、こちんまりとはしていましたが、とても楽しかったことを覚えています。

あれから二十数年。大学建物の外観はそれほど変わっていないものの、エレベーターが新調されたり、食堂がおしゃれになったり、別館ができたり、学生ホールがリニューアルされたりと少しずつ変化しています。一方で、ずっと変わらないこともあります。それは、本学のネジ1本までも知りつくした宮下さんが、今日も学内を作業着姿で闊歩されている風景です。そして、いつも見えないところまで丁寧に整備してくださっていることです。

申し訳ないことに、学生の頃には気づけませんでした。この30年の節目に、卒業生を代表して心から感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。本当にありがとうございました。そして、これからも(一日でも長く) よろしく願いいたします。



元基礎看護学講座 学内講師

相原 ひろみ

(看護学科卒業生)

入学した5月に新入生オリエンテーションで、久万町にレクリエーションに行きました。同級生と楽しんだ記憶は今でも思い出せます(左)。アルバムを探して、ようやく勉強しているっぽい写真を見つけました。勉強風景ってあまり写真に残していないんですね。「心の糸電話」・・・もし、この資料があったら、じっくり見たい気持ちです(中央)。卒業式です。恩師である野本先生、青木先生、岡田先生と一緒にです(^^♪)(右)



県病院の更衣室は昼の部屋でしたね、お昼ご飯を食べたり、記録を頑張ったりしていました。時代を感じるナースキャップが懐かしい(左)。実習グループの同級生と撮りました(*^_^*)(中央)。実習中の県病院の屋上に上がりました。カギはかかっていなかったんですね。今だと、こんなに勝手には入れないのではないかな・・・すごく見晴らしが良かった気がします。のどかな景色と患者さんの洗濯物と一緒に撮りました(^^♪)(右)

MY MEMORIES

成人・老年看護学講座 助教

西森 句恵

(看護学科卒業生)

卒業式は憧れの袴姿で！短かった学生生活も終わり、ほっと一息…。この頃はまだ、国家試験の合格がわかるのが5月だったため、4月に入職し、合格すればそのまま勤務、不合格なら離職というギャブルな時代。合格できて、本当によかったです。



卒業式は憧れの袴姿で！



“before・after”いかがですか？

短大時代は看護学科3年になると、4月から12月までみっちり臨地実習でした。子どもたちはみんな元気いっぱい、人懐っこく、実習ということも忘れるくらい楽しく遊んだのを思い出します。

謝恩会では、お世話になった先生方と食事を楽しみました。現在も在職している先生と一緒に撮った写真がないか探してみたら、1枚だけありました！現在の写真と比較することになり、ノリノリの人たちに囲まれての撮影会を行いました。あの頃は髪の毛も黒かった野島先生も今年で退官です。



保育所時実習

成人・老年看護学講座 助教

高橋 博子

(地域看護学専攻科修了生)

短大時代には地域看護学専攻（1年過程の保健師コース：30名）

がありました。年齢や出身看護学校もバラバラ、看護師経験もバラバラだったけど、クラス全体がすごく仲良しでした。1年という短い時間で、実習に卒業研究と大変でしたが、みんなでキャンプに行ったり、飲み会を開催して、恋バナに花を咲かせました。



文化祭での出店はみたらし団子



お世話になった宮内先生と記念撮影。飛行機に乗り遅れ卒業式には間に合いませんでしたが、夜の謝恩会にはアメリカで買ったスーツで参加したのでした(^^♪)



「せんせい、あそんで〜」と寄ってきてくれて、かわいいやら楽しいやら。

MY MEMORIES

客員教授 宮内 清子

30周年記念号発刊に寄せて、思い出深い歩みの中から二つのことを述べたいと思います。

一つは、“短大専攻科における教育活動”です。私は、平成3年、専攻科開設と同時に地域看護学専攻に着任、16年間に保健師を目指す学生たちとハードながらも充実した日々を過ごしました。定員30名、人々の健康づくりや疾病予防を目指す公衆衛生看護学の本質と醍醐味を伝えたいと、伊予保健所（当時）や伊予市の協力を得て講義とフィールド活動を連動させた地区実習を導入。家庭訪問、健康相談、健康教育など、住民と直接関わり学ぶ貴重な体験は、地域で活動する修了生に深く根付いています。16年間の修了生は480名、地区実習報告会や公衆衛生看護学研究の時期には不夜城と化す厳しい課程でしたが、互いに支え合い、全員修了という成果をみたことは、学生達の頑張りや教員のチームワークに尽きと思っています。

もう一つは、“大学設置の準備以降の大学運営への関わり”です。平成14年準備室が設置され、準備室員を兼任。教育課程の検討、申請書類の作成など、専攻科教育と並行しての多忙な日々でしたが、教職員の熱い思いに励まれ、平成16年4月、無事に開学の日を迎えました。その後の10年は、教育と大学運営の二つの役割を負うことに…。看護学科長、学部長、研究科長、法人理事と、次第に重くなる責任を痛感しながら組織改革や教育体制の充実を目指しました。外部評価、法人化、助産学専攻科・大学院開設と、まさに怒涛のような日常でしたが、教職員や本学に関わる関係者の理解と協力を得て、平成26年4月、大学院が開設できました。同年9月、大学開学10周年記念式典を多くの関係者と祝いながら、大学の礎が一步一步固まり、さらに発展することを実感し、感無量でした。



地区報告会



健康教育演習寸劇のひとこま



地区活動演習

開学10周年式典 学長挨拶



記念講演「地域に必要とされる大学であるために」



大学院設置申請書類を教職員一丸となって作成しました



MY MEMORIES

臨床検査学科
基礎検査学講座 講師

岡村 法宣

平成8年に前身である愛媛県立医療技術短期大学に着任してから、早いもので23年の月日が流れました。平成16年4月に本学が4年制大学に移行し、短期大学時代には担当している実習が終わるごとに当たり前のように行ってきた反省会という名の打ち上げや、課題研究グループ学生達との夜の海での花火大会など行わなくなりました。田舎の小さな大学ならではの魅力と感じていた学生とのアットホームな雰囲気が少々薄れたようで、なんとなく少し寂しく感じていました。4年制移行から6年経過した平成22年に愛媛県で初めてのリレーフォーライフが開催され、土砂降りの悪天候の中、ずぶ濡れ泥だらけの24時間リレーウォークを通じて、両学科の学生、教員および事務局職員が一致団結した気がしました。この時期の学生達には、研究を手伝ってもらったり、タコ焼きパーティーに誘っていただいたりしたのを昨日のように覚えています。事務局職員さん方とも、休日に香川まで鯉鮓ツアーへ出かけ、優勝トロフィーを作ってテニス大会なども開催しました。あれからさらに10年近くが経過した現在、当時の学生、事務局職員さんの数人とは、今も交流が続いています。研究では大した業績のない私ですが、この人間関係が、私の一番の業績であると思っています。この人と人との糸を大切に切らさぬように、これからも本学で学生、教職員の皆様と地道に歩んで行ければと願っています。



松山赤十字病院・病理診断科部
同窓会本連会会長

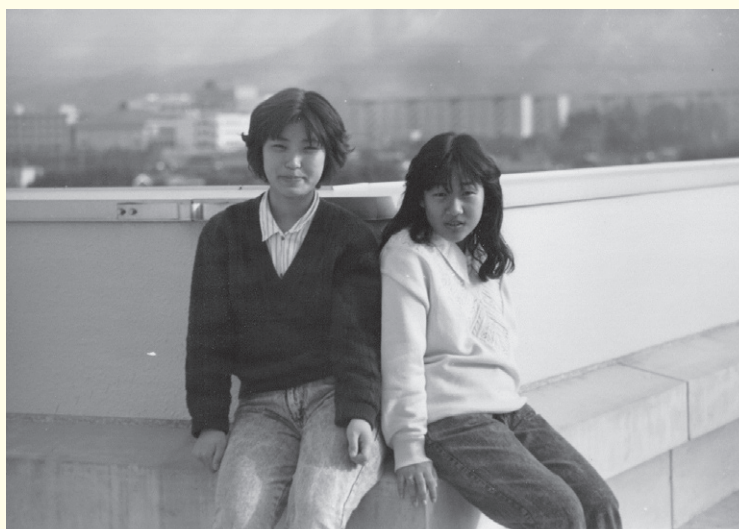
門屋 孝志

(臨床検査学科卒業生)

白黒ですがかわいい女性のツーショット写真は、医療大学の屋上で撮影したものです。当時は屋上へも割と簡単に出ることができました。重信川の河川敷で夏祭りの花火大会が行われていたときは、屋上から眺めたこともあります。医療大学も開学30周年を迎えますが、開学当時の1988年には、スマートフォンは疎か、ガラケーと呼ばれる携帯電話すら学生が持つような身近なものではありませんでした。デジタルカメラの登場は1995年まで待たねばならず、思いついたら即撮影という現在に

比べ、当時は写真1枚にもなかなか気を遣う事が多かったように思います。

この写真は、写真撮影の工程習熟の一環として、白黒フィルムをパトローネ（フィルムを収納するための円筒形のスチールケース）に巻き、一眼レフカメラで撮影した後、フィルムの現像・印画紙への焼き付けまでを全て自身で行った1枚です。図書館の閉館時間が17時だったり、校舎の戸締まりが18時だったりしましたが、今よりもいろいろな制約が、ちょっと大らかだった時代を思い出す、とっておきの1枚です。ふと眺めるとほっこりする、そんな1枚をお持ちでしょうか？



元臨床検査学科
基礎検査学講座 准教授

野島 一雄

この原稿の依頼を受けて何を書けばと・・・、短大時代からの数少ない生き残りとして、とりあえず開学当時の思い出をとりとめもなく書いていくことにします。

昭和63年4月に本学の前身である愛媛県立医療技術短期大学（医技短）が開学し、開学と同時に助手として採用され、高知からこの地に赴任し30年余りが過ぎました。第一看護学科（3年課程50名）、第二看護学科（2年課程50名）、臨床検査学科（3年課程20名）の三学科でのスタートで、開学当初は当然1年生しか在籍しておらず、構内の賑やかさは今とは比べものになりません。ただ、愛媛県で初めての医療系の短期大学！ということで注目を浴び入学式当日、学生を含め教職員も多くメディアの取材を受けていました。そんな中バタバタと講義が始まりました。

短期大学時代は、こんなことやってました。

- * 学生祭：これは何処の大学でも毎年やっていますよね。
- * 運動会：これは、2回だけ？だったかも知れません。
- * ウインターフェスティバル：体育館の窓を段ボールで覆いお菓子を並べ、軽音楽サークルやいろいろなサークルの音楽を聴きました。
- * 新入生一泊研修：一年生と教員が参加し、大学生と高校生の違いから始まり、有意義な大学生生活を送るためには、等の座学のあとにスポーツを通じて両学科の学生の交流を深めました。

この中で今も続いているのは学生祭ですね。新入生対象の研修は、一泊二日、日帰りとな年々その規模が小さくなり、大学になってからは特別なことは行われなくなりました。それどころか講義日程の都合上、入学前から学生生活についての説明会が実施されるようになりました。それから教職員ですが、県庁職員のソフトボール大会（部局対抗）に臨床検査学科教員、看護学科教員そして事務職員で親睦を兼ねて「チーム医技短」を作り参加し、毎年のように優勝争いを繰り返したこともありましたが、草の生えていないグラウンドで汗を流して練習をし、試合に臨んだものでした。短大時代の体育実技はグラウンドで行われており、草の生える暇がなかったと思います。また、今の駐車場の北側半分には照明設備のないテニスコートもありました。短期大学時代に、教授会に対抗する訳ではないのですが両学科の助手（現在の助教）で助手会なるものを立ち上げ、勉強会をはじめ親睦を深めるための会（いわゆる飲み会）などを企画していました。勉強会では外部の先生をお呼びした時もありました。いろいろ書いてきましたが、短期大学時代の方が、何か余裕があったように感じているのは私だけでしょうか？



おおぞら病院 検査部副主任

西原 由記

（臨床検査学科卒業生）

卒業して早20年が経とうとしています。在学中の思い出は数知れず、未だに同窓会の度に短大時代（私の在学中はまだ短大でした）の思い出話に花が咲きます。個性的なクラスメイト揃いで先生方には大変ご心配やご苦勞をおかけしましたが、素敵な学校生活を送ることができました。

中でも、在学中に得た一番大切なものは友人です。今でもなんでも相談できる親友と出会いました。授業後にごはんに行ったりこたつでビデオを見たり、週末はお泊まりして語り合ったり。授業や実習で忙しいことを言い訳にして、旅行や在学中にしかできないようなことを積極的にしなかったことが悔やまれますが、とても充実した3年間でした。



助産学専攻科 講師

今村 朋子

(助産学専攻科修了生)



高校時代から助産婦を目指していた私…、憧れの短大助産学専攻に入学してからの1年間は、「本当に学びたいことがやっと学べる！助産婦になれる！」と、うれしさとワクワクの毎日でした。入学してすぐに行った宿泊研修ではお酒を飲みすぎて、二日酔いのまま帰ったことや、先生やクラスメイトと京都に行った、母性衛生学会の研修旅行もいい思い出です。

でもやはり、一番の思い出は実習で、初めての分娩介助の前日は緊張で一睡もできず、吐きそうになりながら1例目の介助を終えました。後にも先にも、人生であれ以上緊張したことはありません。頭が真っ白で、何もできなかった自分が情けなく、受持ちを終えて大泣きしてしまった私を助産婦さんがなぐさめてくれたことを思い出します。各学生には2名ずつ助産婦さんが指導者としてついてくださり、そのお二人は、今でも憧れの存在で、私の原点です。

そういえば、継続さんの分娩開始時の呼び出しツールは、今はなき「ポケベル」でした。3月、高松で行われる国試の前日は、香川に引っ越した継続さんに会うチャンスと思い、同級生と一緒にバスに乗らず、一人で継続さんに会いに行ってからホテルで合流する自分勝手な学生でした。でもその時、生後5か月に成長した赤ちゃんの姿に感動し、子どもの成長をずっと見届けられる大切さを実感しました。その継続事例さんとは今も年賀状でつながっていて、母としていつまでも私の憧れの存在です。

修了式の時は、先生から学生それぞれのキャラに合った勝負パンツをいただきました。私は無難なパンツでホッとしましたが、友人のパンツは黒のレースやTバック、デカパン…といろいろあって、これから助産婦として、女性として、「パンツは大事なアイテム」と、妙に納得しました。

それから20年以上がたち、教員として、今も母校にお世話になっています。平成24年に大学助産学専攻科を立ち上げた時は、学生時代に感動したことや、もっとやりたかったことをカリキュラムに加えて、修了前の継続さんとのお

出かけ実習や、助産院での自然出産への立ち会いなどが実現できました。

学生時代にどんな人と出会い、何を経験するのかということ、助産師としての根っこが作られると思います。学生時代に憧れた助産師さんたちは今も現場で活躍されていて、実習で会うたびに昔の自分を思い出して新鮮な気持ちになります。また、先輩や同級生には非常勤講師として授業を担当していただくなど、本学の助産師教育は本当に多くの方々に支えていただいていることに感謝でいっぱいです。これからもまた、新たな学生が育つ1年を見届けていきたいと思います。

※当時の記述は法改正前の名称「助産婦」を用いました。



今も実習室にある分娩介助用の電動ファーム

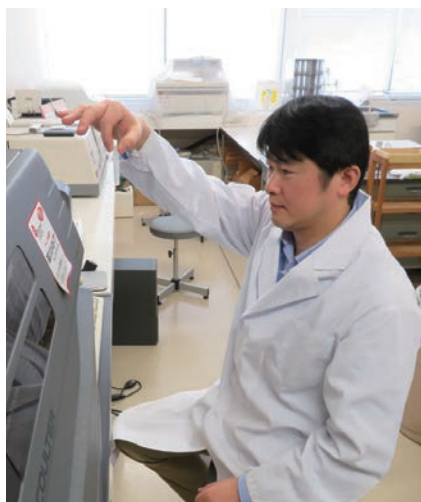


実習室で病院の助産婦のデモストを見学した後の集合写真



修了式でいただいたパンツ

研究室紹介



臨床検査学科 基礎検査学講座 教授

山田 武司

平成12年 3月	東京大学大学院医学系研究科博士課程修了(医学博士)
平成12年 4月	厚生省医薬品副作用救済機構 博士研究員
平成13年 4月	東京大学大学院医学系研究科微生物学講座 助手
平成17年 4月	米国ペイラー医科大学病理・免疫学分野 博士研究員
平成22年10月	米国ペイラー医科大学病理・免疫学分野 インストラクター
平成25年 5月	愛媛大学大学院医学系研究科感染防御学講座 准教授
平成30年 4月	愛媛県立医療技術大学保健科学部臨床検査学科 教授

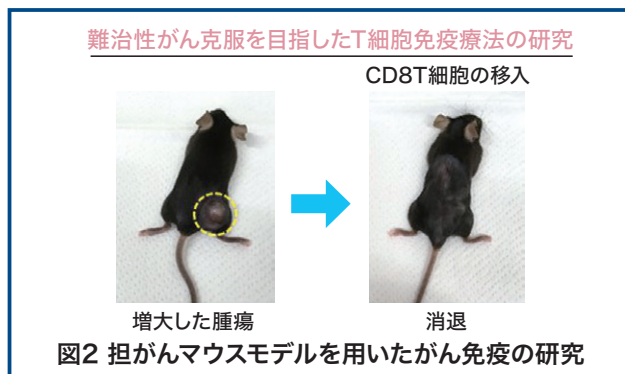
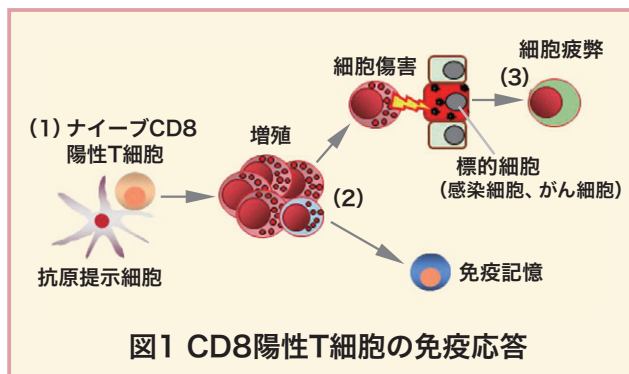
感染症およびがん克服を目指した免疫療法の開発

私は、平成30年4月に愛媛大学医学部から異動し、医技大では臨床検査学科の免疫学を担当しています。今回は、私が長年行っている免疫学研究についてご紹介します。

皆さんは「免疫」と聞くと難しいと感じるかも知れません。免疫には実に様々な細胞や因子が関わっており、メカニズムが非常に複雑であるためそう感じるのも当然かも知れません。免疫系は生体防御にとっては不可欠であり、それ故、世界中で多くの研究者が詳細なメカニズムの解明に取り組んでいます。免疫系を大きく分けると、生まれながらに備わっている自然免疫系と、感染やワクチンの接種によって得られる獲得免疫系が存在します。体内に侵入した病原体は、まず好中球やマクロファージといった食細胞を中心とする自然免疫系によって殺菌・排除されますが、抵抗性を示す病原体に対しては、より強力な免疫である獲得免疫系が働き、病原体を認識して排除してくれます。また、この獲得免疫は長期間記憶され、同じ病原体の侵入に対して効率よく感染を防いでくれます。これが、我々がよく利用するワクチンの原理となっています。これまで私は、獲得免疫のなかでも感染細胞やがん細胞を監視してそれらの細胞を傷害してくれるCD8陽性T細胞と呼ばれる免疫細胞の研究を継続して行っています。具体的には、CD8陽性T細胞に焦点を当てた以下の3つのメカニズムについて研究を遂行しています。

(1) 未感作（ナイーブ）T細胞の増殖制御メカニズム、(2) 細胞傷害性T細胞および免疫記憶T細胞への分化制御メカニズム、(3) 活性化T細胞の疲弊抑制メカニズム（図1）。これらのメカニズムを詳細に解析することで、免疫応答を自由に操作することが将来可能となり、効率よく感染細胞やがん細胞を排除できることが期待されます。

現在は、特に高齢化社会で問題となっているがんに対する免疫療法に力を入れた基礎研究を行っています。その例として、がん細胞をマウスの皮下に接種することにより担がんマウスモデルを構築し、免疫応答を操作したT細胞をこの担がんマウスに移入して、効率よくがん細胞を排除する研究を行っています（図2）。こうした基礎研究を積み重ねることにより、臨床応用可能な免疫療法を開発し、従来の薬剤では治療が困難とされる感染症やがんの克服を目指しています。



客員教授紹介



みやうち きよこ
宮内 清子 教授

2016年4月～本学客員教授。前学部長。愛媛県の保健・福祉分野においては、欠かせない存在で、学部長として在任中の2015年当時、大学が愛媛県と自治体と三位一体で行う地域包括ケア人材育成事業の代表者として事業を担っていただいています。週2回、大学の「地域交流センター」に來学されています。

略 歴

国立公衆衛生院専攻課程看護学科 修了。愛媛大学大学院法学研究科 修了（法学修士）1965年～12年間、保健所勤務ののち、1977年から愛媛県立公衆衛生専門学校、1991年からは愛媛県立医療技術短期大学に赴任。その後、一貫して愛媛県立医療技術短期大学・大学・大学院において教育に従事し、専攻科長、看護学科長、学部長、研究科長を歴任。2016年3月、学部長任期満了にて退職。その間、愛媛県看護協会副会長、教育委員会委員長、保健婦職能委員長等を歴任。現在、愛媛県高齢者保健福祉計画等推進委員会会長、愛媛県介護予防市町支援委員会会長、愛媛県介護支援専門員研修向上委員会副会長。地域の保健福祉分野において要職を務める。2017年から公益社団法人 日本看護協会 名誉会員である。

1986年 愛媛県看護協会会長表彰
1998年 愛媛県知事表彰
（永年勤続表彰・優良看護職員）
1999年 日本看護協会会長表彰（看護業務功労）
2007年 厚生労働大臣表彰（看護業務功労）
2016年 平成28年度愛媛県政発足記念日知事表彰
（保健衛生功労）

えんどう や え た
遠藤 彌重太 教授

2018年4月～本学客員教授。本学では、先生のこれまでの世界的な研究業績に基づく科学の楽しさ・醍醐味を学生に伝えていただくとともに、大学院生・教員の研究アドバイザーをお願いしています。

略 歴

1946年生、徳島県阿南市の出身。徳島大学大学院栄養学研究科博士課程修了（保健学博士）。徳島大学医学部、米Chicago University生命科学研究所センター、山梨医科大学（現山梨大学）医学部勤務を経て、1992年から愛媛大学工学部に教授として赴任。2003年4月には、愛媛大学に設置された。無細胞生命科学工学研究センターのセンター長に就任。2012年3月愛媛大学を定年退官後は、2018年3月までカリフォルニア大学客員教授、愛媛大学特別荣誉教授としてさらなる研究の発展と後進の指導にあたる。現在、愛媛大学名誉教授及び特別荣誉教授。基礎的・独創的な一連の研究から得た知見をもとに、世界に先駆けて、コムギ胚芽を用いる無細胞タンパク質合成法の開発に成功。この技術は、どのようなタンパク質でも試験管内で遺伝子から自由自在にこれを大量に合成する技術で、ポストゲノム時代の中心的な基盤技術として利用されている。



1990年 国際イムノトキシン学会賞
2003年 第3回山崎貞一賞
2006年 平成18年有馬啓記念
バイオインダストリー協会賞
2008年 平成20年科学技術分野の文部科学大臣表彰
科学技術賞研究部門

西日本豪雨災害ボランティア

水害支援活動

地域・精神看護学講座 助教

長尾 奈美

私たち看護学科教員は、2018年7月の西日本豪雨時にダムの放流と肱川氾濫により甚大な被害を受けた大洲市肱川地区にある肱川保健センターで7月31日から8月10日のうち計7日間支援活動を行いました。各日3名ずつがチームを組み、計14名（延べ21名）で、水没した健康管理票等の書類復旧にあたりました。支援開始時は、肱川に沿って走る国道197号線の一部が陥没や土砂崩れにより通行止めとなっており、水害の恐ろしさを肌で感じながら現地に向かいました。

現地での主な作業は、泥が付着したまま十分に乾燥していない書類をドライヤーで乾燥させた後、アイロンがけによるシワ取りや汚れ取りをし、コピーやデータ入力による書類復旧で、岩手県からの支援チームとも協力しながら行いました。活動が進むにつれて、復旧が進む町の様子もみられました。また、長年にわたり肱川地区で住民の健康を守ってこられた保健師さんの住民に対する温かい思いに触れ、一日も早い復興を祈るばかりです。



被災ゴミ



今回活動した肱川保健センター

被災住民に寄り添った健康・暮らし相談支援

成人・老年看護学講座

講師 江崎 ひろみ 助教 宮宇地 秀代 助教 高橋 博子

豪雨災害被災地では災害中長期の課題として、高齢者の孤立やひきこもりを防止し、生活の変化に伴う健康問題への対応が急務です。私たちは、高知県立大学大学院「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」のひとつである宇和島支援プロジェクト『まちの保健室“だんだんカフェ” in 吉田』に参加し、健康・暮らし相談支援を行っています。このプロジェクトは、平成30年9月～3月の期間、宇和島市役所・宇和島市社会福祉協議会の協力のもと、海外留学院生を含む多様なメンバーで活動しています。

“だんだんカフェ”には、独居高齢者や仮設住宅で生活する住民、小さなお子さんを連れたお母さん達が集います。私たち3名はボランティアとして、地域の看護師・保健師と協働し血圧測定やお困り相談に応じ、健康な生活を送るための健康講座を担当しました。茶菓で寛ぎながら会話も弾み、「あ～楽しかった。いろいろ話することが体にいいね。次はいつ？」と継続参加される方も増えています。“だんだんカフェ”は、高齢者と小さな子どもたちの交流の場となり、子どもたちの笑い声や泣き声すべてが微笑ましく、高齢者の支えとなるように思います。私たちは、プロジェクトメンバーと共に、被災後からの日常生活を取り戻す過程を見守りながら、被災住民の健康問題を拾い上げ、継続支援やケアを受けることができる体制の一部を担うことができればとの思いで活動しています。



地域交流センター事業

地域に開かれた大学づくり

県民すべての保健・医療・福祉の増進に寄与することを目的に活動し、本年度で16年目を迎えました。地域交流センターはこの目的実現にむけ、①人材育成機能、②調査研究機能、③相談支援機能、④情報発信機能の4つの機能をもち、本学の施設、設備と教職員、学生ボランティア等の人材を活用した事業を展開しています。平成30年度の活動の一部をご紹介します。

えひめ高校生生体機能研究プログラム

テーマ「筋の収縮力と持久力」、人とマウスを対象とした実験を実施しました。



水害災害支援ボランティア活動

西日本豪雨災害被災地にて、住民の心身の健康と生活支援の一助となるよう主体的自主活動を実践しました。



令和元年度活動予定

機 能		事 業 名
人材育成	専門職	ホームカミングデー
		臨床検査実践セミナー
		地域包括ケアシステム強化に資する人材育成事業
		思春期スキルアップセミナー
	一般・学生	えひめ高校生生体機能研究プログラム
		高校生出張講座／メディカルトーク
砥部町麻生地区福祉活動推進懇談会との共同活動		
調査研究		助産師活動に関する母子保健活動調査
		地域包括ケアシステム人材育成事業に関する調査研究
相談支援		専門職からの相談対応や自主研究会・研修会の支援
情報発信		ホームページ・広報誌の活用、活動報告書作成

ご案内

令和元年度 学年歴

	4/1~3	ガイダンス等
	4/3	入学式
4月	4/4~	前期授業
	4/5	健康診断・新入生オリエンテーション
	4/26	交通安全講習会・進路セミナー
5月	5/11・18	内科健診
	6/20	開学記念日
6月	6/22	ホームカミングデー
	8/1~7	前期試験
8月	8/9・10	第1回オープンキャンパス
	8/9~9/30	夏季休業日 (助産学専攻科は8/31まで)
9月	9/7	大学院入試 (一般入試・社会人特別選抜入試)
	10/1~	後期授業
10月	10/18	防災訓練
	10/19・20	学生祭・第2回オープンキャンパス
	11/16	学部 推薦入試・社会人特別選抜入試
11月	11/17	助産学専攻科入試
	12/7	第3回オープンキャンパス
12月	12/26~1/5	冬季休業日
1月	1/18・19	大学入試センター試験
	2/4~10	後期試験
2月	2/25・26	学部 一般入試 前期日程
	3/12	学部 一般入試 後期日程
3月	3/19	卒業式・修了式
	3/20~31	春季休業日

詳細な学年歴はホームページをご参照ください。
<http://www.epu.ac.jp/campus/calendar/index.html>

図書館利用案内 《学外の皆さんへ》



休館日	土日・祝日 12月28日~1月4日 蔵書点検期間 メンテナンスなど
利用時間	平日 9:00~21:00 土曜日9:00~17:00 (入館の際は、受付まで)
館内閲覧	自由にどうぞ。 図書、雑誌、新聞、ビデオなどがあります。
館外貸出	登録の際には身分証明書 (現住所が確認できるもの) が必要です。 貸出冊数と期間は、5冊2週間です。
図書返却	図書を返却するときには、「図書貸出券」は 不要です。 閉館時には、事務棟入口のブックポストに お返しください。
コピー	館内のコピー機でコピー可能。但し著作権法で 許可された範囲内でのコピーとなります。 コピー代金は有料 (1枚10円) 小銭を用意してきてください。
蔵書検索 文献検索	図書館のホームページをご利用ください。 医中誌などのデータベース・電子ジャーナルを 利用できます。 利用前にカウンターまでお越しください。

広報誌「砥礪（しれい）」についての意味

『砥礪（しれい）』とは、「①砥石（といし）②とぎみがくこと」とあり、さらに「学問、修養などを高めようと努力すること【大辞泉：小学館】」などの意味があります。平成16年に大学が開学して1年経った平成17年に、本学の位置する砥部町にちなむとともに、大学広報誌の名称としてふさわしいということで多くの賛同を得て決定された経緯があります。

編集後記

公立大学法人愛媛県立医療技術大学は昭和63年(1988年)4月の短大設立より、30年を経過しました。第15号愛媛県立医療技術大学広報誌「砥礪（しれい）」では、開学30周年を記念し、特集として、卒業生を含む本学教職員から、本学での思い出についてのメッセージをいただき、それにまつわる写真を掲載いたしました。本学が歩んできた30年という長い道のり（歴史）を身近に感じていただけたと思います。

また、研究室や客員教授のご紹介、さらに西日本豪雨災害でのボランティア活動を通して、本学の先生方のお人柄やご活躍を知っていただければ幸いです。

最後になりましたが、お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様に、心から感謝申し上げます。

広報委員会一同



公立大学法人 愛媛県立医療技術大学

〒791-2101 愛媛県伊予郡砥部町高尾田543番地
TEL 089-958-2111 FAX 089-958-2177
ホームページ <http://www.epu.ac.jp/>